様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：３２６４４
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５６０７８９

研究課題名（和文）北欧モダニズムの成立に関する総合的研究－フィンランドの教会建築を事例として

研究課題名（英文）Comprehensive Study of the Nordic Modernism : church architecture in Finland

研究代表者
伊藤　大介（Ito, Daisuke）

東海大学・国際文化学部・教授

研究者番号：６０２０３１４７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、主に文献研究と現地調査の方法によって、北欧における建築近代化とその成果としてのモダニズム建築について論じるものである。特に20世紀フィンランドの教会建築に焦点を当てながら、「北欧モダニズム」の成立過程とその特質を検証している。
　北欧では、モダニズム建築の一般的特徴としての「国際性」とともに、「地域性」も付与された。また建築様式上の発展に加えて、「自然との一体性」というフィンランド的特質も獲得された。そして遂には、宗教を超えて人々の心を支える「社会的公共財」としての役割も果たすに至ったことが、この研究で明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This is aimed at the study about the process of modernisation and its goal of modernism of architecture, by the method of literature research and fieldwork. Focusing especially on the 20th-century-church architecture in Finland, the unique process and characteristics of 'Nordic Modernism' are cleared up.
In general, modernistic architecture has 'internationality'. But, in the Nordic countries, 'regionality' was blended to it. In addition to the development of architectural style, the Finnish 'sense of unity with nature' was acquired, too. In final, the Finnish modern churches reached, beyond the religion proper, to 'the public goods in the society', supporting the human feelings.

研究分野：建築史

キーワード：北欧モダニズム建築　ナショナル・ロマンティシズム建築　教会建築　北欧建築史　近代建築史

１．研究開始当初の背景

西洋建築史、特にその近代建築史の分野においては、20 世紀を支配したモダニズム建築の再検討が重要となってきている。モダニズム研究は現在でも重要な意味を持ち続けており、みずからが所属する同時代研究としてではなく、21 世紀の立場から客観的に評価・検証が可能な歴史的研究対象となったのである。そうした中で、ドイツのバウハウスの理念などに基づく機能主義一辺倒の純粋な運動理念としてだけモダニズムを捉えるのではなく、各国固有の事情や地域性に基づく幅の広い発想の産物として、近代建築史の中に位置づけることが特に必要となってきている。

この視点に立てば、北欧諸国（スウェーデン・デンマーク・フィンランド・ノルウェー・アイスランド）がおもに 1930 年代以降に展開したモダニズムは、まさに地域性を強く漂わした典型例であり、地域名を冠した「北欧モダニズム」と呼ばれるのがまさにふさわしい存在であった。

近年は、北欧モダン・デザイン全般やインテリアへの社会的関心が集まる中で、建築家の G.アスプルンド(1885-1940)、A.アールト(1898-1976)、A.ヤコブセン(1902-71)らの北欧建築家の活動にも光が当てられるようになっている。ただし、その多くは建築家個人のデザイン研究の方向性を持つものが多く、背景をなす社会にまで踏み込んだ研究とはなっていない。北欧モダニズムの総合的な評価や検証には、より多くの建築家や建築作品を丁寧に扱い、その背景にまで目を配ってゆく作業が必要となる。

２．研究の目的

筆者は、1895-1915 年頃の北欧で影響力をもったナショナル・ロマンティシズム建築に関する研究を従来蓄積してきた。その研究から得た視点のひとつが、1930 年頃から始まる北欧モダニズム建築を位置づけるためには、前代のナショナル・ロマンティシズム期から継承された要素を正当に評価することが重要であるというものである。共通する「北欧性」の指標となるものとして、立地環境、特に自然や地方都市との関係、あるいは自国の歴史や伝統を参照する姿勢などが想定される。これらはいずれも、従来モダニズムの理念とは結びつくことのないものとされてきた要素であろう。

本研究は、以上のような点に着目して、北欧モダニズム建築のあり方を総合的に捉えるようと試みたものである。

３．研究の方法

当初から予定していたのは、北欧モダニズムの成立について、特にフィンランドの教会建築を事例として検証することであった。そのためには、20 世紀の当該の建築事例を具体的に定位することを最終的な目的としつつ、そのために必要となる作業として以下のようなものも含めた。すなわち、フィンランドのみならず広く北欧全般に目を向けること、教会建築だけでなく多くの種別の建築を扱うこと、モダニズム以前の初期近代から始まる建築近代化の過程を総合的に理解すること、モダニズムを含む 20 世紀全体の建築の発展を継続的に捉えること、建築の成立をその背景である都市の成長とともに俯瞰すること、などをひとつずつ達成してゆく作業を行ったのである。研究手法としても、総合的な把握をめざす立場から、文献などによる背景の理解から始まり、実際の教会建築の現地調査に至るまで、広い視野に立って行った。

なお、今回の研究期間中に現地にて調査または再調査を行った 20 世紀以降のフィンランドの教会建築は、以下のとおりである。

・トゥルクの聖ミカエル教会
(1893-1905／L.ソンク)
・タンペレ大聖堂
(1899-07／L.ソンク)
・ヘルシンキ・テーレ地区の教会
(1927-30／H.エケルンド)
・カンノンコスキの教会
(1938／P.ブロムシュテット)
・トゥルク公共墓地の復活礼拝堂
(1939-41／E.ブリュッグマン)
・オタニエミ学生村の礼拝堂
(1956-57,78／H.シレン設計)
・タンペレのカレヴァ教会
(1964-66／R.ピエティラ設計)
・ヘルシンキのテンペリアウキオ教会
(1968-69／T.&T.スオマライネン設計)
・ヘルシンキ・ミュールマキ地区の教会
(1980-84／J.レイヴィスカ設計)
・エスポー・オラリ地区の教会
(1981／K.+S.パーヴィライネン)
・ヘルシンキ・カンピ地区の礼拝堂
(2008-12／K.リントゥラ+N.シロラ
+M.スンマネン)

この他に、すでに蓄積している資料やデータも適宜利用した。

４．研究成果

(1) 教会建築を扱う前提として、中世以来の北欧全般の教会建築について、その特質を検証した。

①中世北欧には建築家はもちろんおらず、大聖堂建設で職人を束ねて陣頭に立つ工匠も、各地の司教とのつながりでヨーロッパ各地からやってきた。工匠たちはそれぞれ地元の大聖堂の様式を携えてきたため、北欧の大聖堂はヨーロッパの様々な国（ドイツ、フランス、イギリス、イタリアなど）の大聖堂の姿を彷彿とさせる外来文化であった。

②一方で各地の小村に建った教会は、地元で得られる建設材を使い、土着の構法で建設された。地方の風土の中に溶け込むようにして

立ち、それぞれの村で日々暮らす人々の心の拠りどころのような存在であることが多い。

ヨーロッパ文化と独特の距離感があり、一方で風土とのつながりを常に無視できないのが、近代以前の北欧の建築であった。そうした事情は、近代化を達成したあとの北欧にも、一定の留保をつけながらも適用できる視点である。

(2) モダニズムに至る以前の初期近代建築を理解しておくことが必要である。そのため、主にヨーロッパの西暦 1900 年とその前後 10 年間ほどの期間に作られた建築を概観し、その多様性を検証した。

①この時期の建築は、従来の歴史的様式の遵守にこだわらず、また地域ごとの固有性も容認されていて、それらにそれぞれの名称が与えられている。フランス・ベルギーでの「アール・ヌーヴォー」、ドイツ語圏諸国での「ユーゲント・シュティル」、ウィーン(オーストリア)での「ゼツェッション(分離派)」などがよく知られる。

②但しその他にも、イギリス・スコットランドでの「グラスゴー派」、スペイン・カタロニア地方での「モデルニスモ」、ハンガリーでの「トランシルヴァニア派」、北欧やバルト３国での「ナショナル・ロマンティシズム」など、多様を極めた。ここに挙げた地域性を秘めた近代化への建築動向は、個々の事象は異なれ、「周辺国型」とまとめて捉えることができる。

(3) 周辺国型の建築近代化の典型例としてフィンランドを想定し、その過程を詳細に跡づけた。19 世紀初頭から 20 世紀前半までを扱い、主要建築と並行させて当時の社会事象も含めた年表を作成した上で、期間中の各時期の志向性の変遷を、「ヨーロッパらしくなること」→「ヨーロッパらしくなくなること」→「フィンランドらしくなること」と総括した。

(4) 次いで 20 世紀に入り、まず範囲を再び北欧全体に広げて、その建築全般の大きな流れを概観した。北欧の建築は 20 世紀にも過去とのつながりを強く意識しており、それがナショナル・ロマンティシズムから北欧モダニズムへの展開を生んだ。さらに戦後は社会民主主義が中心の政権下で建築にもその影響が及んだ一方で、1970 年代以降にはかつての「生活」や「自然」への着目が、「環境」を重視する姿勢に収れんしていった。

(5) 建築を都市の発展とともに捉える作業を、20 世紀前半のヘルシンキを対象として行った。

①世紀転換期にはナショナル・ロマンティシズムの重厚な公共建築が都市を飾る一方で、住環境としての中層都市住居や郊外住宅地がフィンランドにも出現し、ナショナル・ロマンティシズムの建築家たちもそこに加わった。

②都市自体も急速に拡大膨張し、中心部の再開発が課題となり、従来からの懸案であったテーレ湾を埋め立てて商業空間とする提案を巡って「カンピ＝テーレンラハティ問題」が浮上した。これは都市中心部近くに自然を残すことの適否をめぐるフィンランド人の意識に関わる大きなテーマとして、現代にまで継続している。

(6) 次いで 20 世紀の後半について、建築に絞ってフィンランド全体の俯瞰を行った。

①戦前からのフィンランド建築の系譜は、1950～60 年代に頂点を迎え、戦前から活躍してきたアールトの最盛期の作品群に加え、台頭してきた若い世代の建築家たちも新鮮な建築を生み出した。

②その後、1970～80 年代のやや沈滞した時期を挟み、1990 年代以降にフィンランド建築はまたそのレベルを高めた。巨塔のようなアールトの存在にも特に囚われない新しい世代のフィンランド人建築家が多く出現し、現在に至っている。

(7)以上のようなフィンランド建築の動向に対し、日本側がそれをいかに受容したのかについても検証を加えた。1950 年代頃から、日本人建築家はフィンランドに注目し、建築雑誌などを通じて、多くの建築が紹介され賞賛された。バブル経済期に突入してその関心は失われたが、現在は再びその関心が復活しつつある。フィンランド建築への評価の浮沈の変遷は、日本の建築や社会の方向性をそのまま映し出す鏡のようなものと捉えられる。

(8) 全体の後半は、対象を 20 世紀フィンランドの教会建築へと絞り込んだ。教会建築を重要なテーマのひとつとしていた建築家として、ラーシュ・ソンク（1870-1958）とアルヴァ・アールト（1898-1976）の２人をまず検証対象とした。

①ソンクは、出自としてスウェーデン系文化圏に近いところにありながら、ナショナル・ロマンティシズム建築を確立した。特に花崗岩を用いた重厚な建築の表現は際立っている。次の４つの教会建築の実例を分析した。
・トゥルクの聖ミカエル教会(1893～1905)
・タンペレ大聖堂(1899～1907)
・ヘルシンキ・カッリオ地区の教会 (1906～12)
・ヘルシンキのミカエル・アグリコラ教会 (1930～1935)

特に前２者は、ナショナル・ロマンティシズム建築のそれぞれ初期と盛期の建築の典型例といえるものである。

②アールトについては世界的にもよく知られた存在であるが、視点をフィンランド内部に置き、風土と地縁に発するモダニズムとして捉える試みを行った。以下の５教会について、その実現の経緯や基本的な特徴を整理した。
・ムーラメの教会（1926～29）
・イマトラのヴオクセンニスカの教会
（1956～58）
・セイナヨキの教会と教区センター
（1952,1956～62／1956，1962～67）
・ラハティの教会（1969～79）
・リオラの教会（1966，1975～78，1993～94）
なかでもイマトラの作品に見られる機能の複合された空間は、アールト個人の嗜好の見事な結晶であるとともに、フィンランド20世紀の教会建築のあり方に大きな影響を及ぼした例とも言える。

(9) ソンクとアールト以外の 20 世紀の教会建築も、当然分析の対象である。この２者の作品も含めて広く 20 世紀を俯瞰して、フィンランドの教会建築が実現させた特質をいくつか抽出して、実例とともに検証を加えた。
特質その１は、様式・デザイン面での時代の表象となった点である。

①アール・ヌーヴォー期またはナショナル・ロマンティシズムについては、すでに言及した建築家ソンクによるトゥルクの聖ミカエル教会がその代表である。ナショナル・ロマンティシズム初期の手法として、民族や風土に由来するモチーフを、装飾として貼り付ける手法が採られており、例えば建築の内外に用いられている「キノコ」の図像は、フィンランドの森の豊かさを想起させよう。一方同じソンクのタンペレ大聖堂では、ナショナル・ロマンティシズム後期の花崗岩の存在感を生かした表現が実現している。

②続く北欧古典主義からモダニズムへの変遷を示す作品として、ヘルシンキ・テーレ地区の教会とカンノンコスキの教会を挙げた。前者では、ナショナル・ロマンティシズムが解体して再び古典主義による様式的な建築手法が復活している。ただし、その様式はむしろ形態の単純化や合理化のために用いられている。そこから後者のモダニズム的な白い建築への道程は決して遠いものではないことが理解できる。その他、ナッキラの教会(1935～37／E.フットゥネン)は内部空間の壁や天井を彩度を落とした原色で塗り分けており、デンマークなどにも見られる北欧型モダニズムの空間の例となっている。

(10)フィンランドの建築を様式や形態面からのみ判断することは有効ではない。特質その２として、教会建築が自然との一体性を具現する存在となった点を挙げた。

①まずは、木を媒介としての例として、オタニエミ学生村の礼拝堂がある。建築内部空間の木との親密感に加えて、祭壇うしろの全面ガラス窓の外には森と十字架がある。これに接することで、教会内に身を置く人間は自然に棲みこむ感覚を得る。この他にも、フィンランド建築における木とのつながりは構法的にも空間的にも大変レベルが高い。

②次いで、花崗岩を媒介とする例として、まずはタンペレ大聖堂があるが、より現代に近い例としては、テンペリアウキオ教会を挙げることができる。ヘルシンキ市内でも見かけることの多い花崗岩の岩盤隆起をそのまま残して、建築を作るために更地にして壁を建て上げるのではなく、隆起部分を上から掘り込み内部空間を作り出し、銅板で屋根だけを架けた。教会の内壁がむき出しの花崗岩でできているという充実感は、他では得られない感覚であろう。

③自然との一体性を表現するフィンランド教会のもうひとつの方法は、光を媒介とするものである。ただし、ここでの光は宗教性に基づく象徴的な光とは異なる。むしろ、針葉樹の森に入って歩き回る際に感じられるような、木立の間を縫って上方から降り注ぐ淡い光である。この光を愛する感覚は、多くのフィンランド人に強い。この光を教会の内部に持ち込んだ早い例がタンペレのカレヴァ教会であったが、それ以上に見事な形で実現させたのが、ヘルシンキ・ミュールマキ地区の教会であった。内部空間には縦長のスリットから自然光が差し込み、吊り下がったペンダントライトが作る縦のラインと交錯して、教会内部に「木漏れ日の森」を現出させる。

(11)特質その３として、人間の活動に場を提供する施設として教会が生かされている点がある。

①まず教会本来の役割の中では、特に北欧人の死への思いを共有する場としての使途がある。世界遺産になったスウェーデン・ストックホルムの森の墓地などの例にも感じられるように、これは北欧人全般に多く見られる深い思いである。フィンランドの場合は、トゥルク公共墓地の礼拝堂がそれに相応しい空間を作り出している例である。葬儀に際して、祭壇に対して右上から自然の光が降り注ぐ。その光は季節や天候、あるいは時刻によって移ろい、祭壇付近に設えられた死者のための場も光とともに移ろってゆく。「死して自然に還る」という北欧人の思いに応えてくれる空間が、ここに用意されている。

②次いで、特にプロテスタント教会に要求さ

れる役割として、地域のコミュニティーに奉仕して場を提供するというものがある。その早い例は、アールトのイマトラのヴオクセンニスカの教会に見られる。つまり、その内部は宗教性に基づく象徴的空間であるとともに、電動間仕切りで３分割することで、それぞれの小部屋が地域住民の集会所としても使用可能となる面も持っている。先述したアールトの複合的空間への嗜好だけが理由で生まれたものではなく、むしろフィンランドの教会が地域に融和するための手段として率先して受け入れた役割でもある。

地域のコミュニティーの場としての役割をイマトラとはやや別の形で実現したのが、エスポー･オラリ地区の教会である。ここでは、教会内部というより、隣接して用意された中庭がその役割を担う。交通量の多い幹線道路側の壁面は高く閉鎖的に作られる一方で、逆側では教会は中庭に対して開く。その中庭には大きな木が枝を広げ、心地よい静かな空間が用意されている。時に保育園の園庭としても開放され、子供たちの歓声が響くこともある。建築を中庭に向けて開く方法は、遡ればアールトのセイナッツァロの役場という先例もあった。建築家パーヴィライネンの空間構成は、あきらかにこの役場中庭が下敷きにされていて、アールトの提案した空間が以後のフィンランドで普遍化されていったことが読み取れる。

③最後に、現代社会の中での瞑想の場としての教会について触れる。教会は本来キリスト教に基づく祈りの空間であるが、現代のフィンランドではそれが宗教を超えた万人の心の救済の場としての役割を付与されることがある。先述のオタニエミ学生村の礼拝堂も人が森によって心を休める空間を提供していたが、他にもトゥルクの聖ヘンリー礼拝堂（1995～2005／M.サナクセンアホ）は、７つのキリスト教派が合同で人々の魂の救済の場として計画したエキュメニカル（全キリスト教）礼拝堂である。

21 世紀に入り、同じ役割を担ってさらに広く万人に開放される形で出現したのが、ヘルシンキ･カンピ地区の礼拝堂である。これはヘルシンキ教区と市当局社会福祉課の協働で、あえて現代の都会の喧騒の中に建設され、日々の忙しい暮らしの合間に心の平安を求める人々が、わずかな時間でも立ち寄って静かな空間にひたり、瞑想する場として意図されている。フィンランドの現代教会建築がゆき着いたひとつのあり方がここに示されている。

以上のようにフィンランドの教会建築は、ヨーロッパ文化の輸入の産物として始まった中世の当初から、近代に向け次第に国内での基盤を確固としたものにして、20 世紀には自然との一体性という北欧らしい独自の性格も獲得し、さらには特定の宗教の教義に縛られずに人々の心の安定に奉仕する「社会的公共財」としての地位を付与されるに至っている。建築デザインとしての価値も、こうした特質や役割の変遷に沿って多様な姿を作り上げてきたものだと総括することが許されよう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計 2 件）

① 百瀬宏　村井誠人　長谷川清之　伊藤大介　他、丸善株式会社、北欧文化事典、2016（予定）

② 山本健児　平川一臣　葛野浩昭　伊藤大介　他、朝倉書店、中央･北ヨーロッパ（世界地理講座第 9 巻）、2014、364-368

〔その他〕
ホームページ等
http://www.sapporo.u-tokai.ac.jp/daisukeito/　（東海大学･伊藤大介研究室ページ）
ここからのリンク先に、今回の研究成果の詳細版（約 90pp）を公開します。

６．研究組織
(1)研究代表者
伊藤　大介（ITO, Daisuke）
東海大学・国際文化学部・教授
研究者番号：６０２０３１４７